

ラ・ボナルディエールは *Le Livre de la Sagesse dans l'oeuvre de saint Augustin*, dans *Revue des Études Augustiniennes*, 1971, XVII, 1-2 でこの言葉を引きつつその方法論をのべている。

「アウグスチヌスがいかに聖書を知り、理解していたかをとらえようとするには、二つの道がひらかれている。その著作から年代を追ってはじめて、個々の著作と聖書との関係を学ぶこと。聖書の各書そのものからはじめて、その、アウグスチヌスの著作を経過しての遍歴 (l'aventure) を学ぶこと。」 p. 172

そして後者を彼女のライフ・ワークとしてえらんだという。ここに紹介したエペソ 5, 31-32 に関する研究もその道筋に沿ってなされたものである。それは一見職人的な仕事のようにみえる。しかしなんという堅固なメチエであろう。彼女の裡にある幻をこの徹底的な分析の奥にひとは見ないであろうか。

William J. Hoye: *Actualitas Omnium Actuum.*  
*Man's Beatific Vision of God as Apprehended*  
*by Thomas Aquinas*

Verlag Anton Hain, 1975

稲垣良典

本書の著者は米国出身であるが、現在は西独のミュンスター大学に在職中である。評者は1974年ローマナポリで開催された国際トマス学会に出席したさい、たまたま宿舎で同じ部屋をふりあてられ、トマス研究、および当時筆者が参画していたクザーヌス全集校訂をめぐる種々の問題について話しあった記憶がある。

トマスの至福論についてはガリゲー・ラグランジュの註解、およびラミレスの詳細を極めた註解があり、また論争的著作も多く書かれているが、本書はフェブロ、ジルソン、ド・フィナンスなどによって開拓された、トマス形而上学の中心である「エッセ」研究の成果を土台にしてトマスの至福直観の概念に光をあて、またこれ

まで見逃されがちであった諸側面をうきばりにしようとする試みである。さらに著者のトマス形而上学理解に大きな影響を与えているのは、本質は究極的にいて固有の実在性を有するのではなく、その全体においてエッセに還元されることを強調したW・カーロのいわゆる「薄い本質」説である。(これと対立するのは、従来のスコラ学者に多く見られる、形而上学的原理としての本質に何らかの固有の実在性——たとえ可能態としての制限・限定という機能であっても——を帰属せしめようとする「厚い本質」説である。)

本書は二部に分けられ、第一部(創られざる至福)ではそれとの合一において人間の至福が実現されるころの神自身、すなわち客体的至福が、第二部(創られたる至福)においては人間による至福への到達そのもの、すなわち主体的至福が考察される。至福ないし至福直観は神学的主題であり、最近はもっぱら哲学者たちの手によっておし進められてきたトマス研究の成果をこの神学的主題に適用することは、もともとトマス自身において哲学は神学に秩序づけられていて「絶対的な秘義を語る測り難い『言葉』を聴きとる能力を改善するための方法」(40ページ)であったことにてらして、意義のあることだと著者はのべている(9ページ)。

以下、本書の叙述に従って興味深い議論や問題点を拾いあげてゆこう。著者が最も力を注いでいるのは、トマスが神を呼ぶのに最もふさわしい名前であるとしている「自存するエッセそのもの」における「エッセ」の意味の解明であるが、そこでは一貫してトマスの言うエッセは「内実的(intensive)エッセ」であるとするファブプロ説が固守されている。「内実的」とは「内包—外延」の規則を超えるものであって、エッセをあらゆる現実性と完全性の充溢をふくむものとして捉える観点を指すものとされている(33ページ)。ここで著者はトマスのエッセを新プラトン哲学に還元してしまうK・クレーマー説の批判にはかなりのページを割いているが、屢々引用するジルソンやK・ラーナーとファブプロ説との相違には本文では触れていない。注目に価いするのは「エッセそのもの」は純粹に哲学的な観念ではなく、啓示された神の名前であるとの指摘であり、これに関連して著者は現代聖書学の傾向に触れ「こんにち聖書積義が(聖書の)人間たる著者によって意図された意味を追求しているのにたいして、聖トマスは神的著者によって意図された意味に注意を集中しているのだ」(39ページ)と論評する。この点に関連して著者が181ページ注68でO・ク

ルマンの説く時間の聖書の意味について「クルマンは啓示された秘義のうちにできるかぎり深く透入するためにあらゆる入手可能な手段を活用する代りに、神学は二千年後もどりすべきだと提言している」と批判しているのは傾聴に値いすると思う。

第一部第三章でエッセそのものとエッセ・コムーネの区別（著者はエッセ・コムーネはエッセそのものの或る側面を表現するもので、トマスは新プラトン哲学におけるエッセそのものを指すのにこの語を用いたと解釈する）を論じたのに続いて、第四章でエッセの分有に関するトマス説を考察し、この説は神の被造物に対する絶対的な超越と、最も親密な内在を説明するものである、としているのは適切な指摘であると思う。しかし113,115 ページで、質料が存在の一つの様相であるかぎり、神が全的な質料原因であるとの結論は不可避であり、神は何らかの仕方で「質料的」である、と主張しているのは理解に苦しむ。著者は、質料がエッセであるかぎり、何らかの仕方で神のうちに存在するのでなければならず、質料が神のうちに在り、神が質料的であることをトマスは否定しなかった、というのが、トマスが主張したのは第一原因たる神の原因性は（第一）質料にも及ぶということであり、そこから筆者のような結論を導きだすのは不可能であろう。

121 ページで、創造主と被造物との関係を説明して、被造物の側からはこの関係は実在的であるが、創造主の側からいえば単に観念的であるとするトマス説に触れ、この学説はあたかも神が被造物にたいして無関心であるかのような印象を与え、しばしば困惑のもとになっているが、それは誤解にもとづくとして著者は主張する。著者によると「神の被造物にたいするこうした関係が観念的と呼ばれた真実の根拠は、被造物が自存するエッセそのものの次元において捉えられるかぎりでは神の外に在るのではなく、むしろ神と同一であるということにはかならない」(123-124ページ)。このような解釈は、エッセの観点から被造物における神の親密な内在を説明しようとする試みとしては興味深いものがあるが、被造物が神のうちに在るかぎり神とは別物ではなく、神的本質と同一である、というトマスの言葉を、ここで著者が行なっているように解釈できるかどうか、疑問であると思う。

ところで神と被造物との関係を、自存するエッセそのものと分有によるエッセとして理解した場合、すべては神のうちに在り、すべてのものにおいて在るのは神にほかならぬ、という汎神論の帰結が不可避であるように思われるかもしれない。筆

者はこの疑問をとりあげて、エッセの分有は神と被造物とを統一的に捉えるための原理であると同時に、被造物相互間、ならびに被造物と神との差異を説明する原理でもあることを指摘する。このことを理解する鍵はエッセの類比性にあり、エッセそのものという時のエッセは在らしめるエッセ（作動因）であり、分有によるエッセは在らしめられたエッセ（結果）であることを理解するとき、汎神論の危険は消滅する、という（135ページ以下）。

第二部ではすべての現実態にとっての現実性であり、それゆえにすべての完全性にとっての完全性である、自存するエッセそのものとの合一という観点からトマスの主体的至福についての学説が考察されるが、その核心をなす「独創的で崇高な洞察」を著者はつぎのように表現している——「もし人間存在が直接・無媒介的に神的本質と合一せしめられるのであれば、それによってかれ自身の存在が神を包みこむべく拡大されるところの当の働き（現実態）は、それ自体神でなければならない」（153ページ）。この言葉によって著者は、神との合一がそれによって成就される働きを指すのに用いられる直視（visio）という言葉が、「視る」とか「認識する」という言葉によってふつう想像されるところを遙かに超える無媒介的・全体的な合一の仕方を指すものであることを強調しているといえよう。

ところで著者は、神的本質の直視がすべての人間的願望の成就であることをトマスは徹底した仕方で受けとっているとして、完全なる至福は単に最も完全な形での願望の充足ではなく、地上で人間が経験するすべての悦楽は、その各々が至福なる直視において完全な充足を見出すのだ、と主張する（161ページ以下）。いいかえると、至福はすべての人間的可能性の完全な現実化なのであり、身体の復活に関してトマスが説いているところは、このことを明白に示しているという（192ページ以下）。ここからして、著者によると、たとえばわれわれが地上で経験する友愛は天国においてその究極の完成に達するのであり（175ページ）、身体的悦楽のなかで最大のものとされる性的悦楽もまた永遠の生命のうちに位置を占めるはずである、との大胆な説をのべている。トマス自身は復活体における性的悦楽の要素を否定しているが、これは著者によるとトマスの性についての見解が一面的にとどまっていたため、現代のより充實的で人格的な見解にしたがえば性と至福とは両立するのであり、永遠的至福における身体の役割を積極的に評価するトマスの基本的立場から

すれば、自分の解釈がより整合的であると著者は主張している（232 ページ）。「天国における性」を肯定する著者の説は、詳しく検討すればこの表題から想像されるほど奇抜な内容のものではないが、おそらく多くの論議を呼びおこすものと思われる。

第五章では、至福に関するトマス説を解釈するさいには、至福の主体たる人間についての周到な人間学的省察がトマスにおいて大きな役割を果していることに留意しなければならない、との指摘が行なわれている。この点に関して著者は主としてラーナーの立場に従う。なお、スコートゥスにおける人間学的省察の欠如に触れている点も興味深いが、ここではその紹介に立入ることはできない。

最後の章は、それによって人間が神の本質に無媒介的に合一せしめられる働き（現実態）そのものの考察にあてられており、当然ながら最も力のこもった叙述であるが、この点に関するトマスの真意はこれまでカトリック神学において定説とされてきたものとは全く違う、と著者は強調する（287 ページ）。問題は至福なる直視においては神の本質が可知的形象ないし形相の役割を果すといわれる時の「形象」「形相」の意味であるが、筆者によるとそれは通常の認識の場合のように認識の原理としての可知的形象ではなく、むしろ存在の原理としての形相と解すべきなのである。この場合、神が形相と呼ばれるのは、それが合一に入る人間知性よりもより完全だからである。見神においてはエッセそのものたる神が無媒介的に、最も親密に知性に現存し、そのエッセの原因たるかぎりにおいて可知的であり、知性を規定する (determinare) ことができる——「これこそキリスト教神学の全体にとって主要的であり、枢要的であり、基本的である」と著者は断言する（292 ページ）。評者はこの場合の形相を認識の原理としての形相と対立させて存在の原理と解することには疑問を覚える。しかし、さきのべたように、見神における神と人間知性との合一が無媒介的・全体的なものであることを、トマスのエッセに関してあらたに獲得された形而上学的洞察にてらして、徹底的に解明しようとする著者の意欲は高く評価すべきであると思う。